

「開業医のための消化器クリニック」

多賀須消化器科・内科クリニック 多賀須幸男 著

多田消化器クリニック

多 田 正 大

医療が高度化するに伴って、医師が修得しなければならない知識や技術があまりにも膨大になり、その結果、自らが得意とする分野とそうでない領域の格差が広がってしまった。特に専門医が大勢いる大病院の勤務医は自らの専門分野にのめり込み、異なる領域の疾患や臓器については関心が薄くなる傾向がみられるが、現代医療の pitfall である。京都・仁和寺の歴代の御抱え庭師である佐野藤右衛門氏は著書「桜のいのち庭のこころ」(草思社)の中で、専門化された現代医療を痛烈に揶揄している。その内容を要約すると“昔の町医者には患者の家族構成、生活環境、食生活まですべてを把握しているので、病人がでてもすぐに対応できる。ところが今の病院では、医者は患者を診ずに検査データばかりで判断している。これでは良い医療にならない。”という主旨である。

何とも耳の痛いところである。

医療のめざす所は勤務医でも開業医(町医者)でも同じであるが、それにしても開業医は all-round player でなければならず、専門分野だけでは診療ができないから大変である。消化器科を標榜する開業医の場合も、“私は食道疾患は診察できません”では通用しない。食道から直腸、肛門までのすべての消化管、そして肝、胆、膵臓をも一通りは診療しな

ければならない。医者は生涯にわたって勉強して、最新の知識を修得しておかなければならないが、特に守備範囲の広い開業医の努力たるや大変なものである。

そのような折、医学書院「開業医シリーズ」の一環として、多賀須幸男先生が「開業医のための消化器クリニック」を上梓された。多賀須先生のご経歴については改めて紹介するまでもないが、消化器科の先駆者として誉れ高い名医である。特に panendoscopy の概念を提唱して、今日の上部消化管内視鏡の基本を確立したご功績は輝いている。そして機会あるごとに、われわれ後輩に医者としての理想像を訓示していただいている。

多賀須先生は“生涯臨床医”を貫くため、長年の勤務医・副院長を退職後、遅い年齢での開業の道を歩まれたのはあまりにも有名であり、後輩に大きな希望を与えて下さった。長年の勤務医・副院長としての豊富な経験と、実地医家としての立場から、開業医の消化器科診療はこうあるべきという理想をコンパクトにまとめたのが本書である。先生の消化器病学に対する理念が本書の backbone であり、コンパクトな文章の端々にその気概がひしひしと感じられ感銘を受ける。

序文でも述べられているように、

大がかりな検査器械がなくても、内視鏡と超音波、血液・生化学検査があれば、開業医であってもたいいてい消化器疾患に対応でき、大病院に負けない内容の診療が可能である。それにはどうすれば効果的であり、誤診も防げるのであろうか、各項目別に診療のポイントを解説しているのが本書の最大の特徴である。単に知識を羅列するのではなく、多忙な開業医が効率的に知識を修得するコツが網羅されており、コンパクトな本ながらも重厚な内容である。

病態生理を考えた問診のコツ、診察、画像診断、対症的治療から本格的な薬物療法までの診療の流れが、簡潔な文章のうちに余すところなく記述されており、気軽に読める消化器科診療の絶好の手引書である。さすがに多賀須先生の著作である。

この書籍の真髄は開業医だけが享受するべきではない。研修医あるいは専門医が幅広く消化器病全般を振り返りたいときに、要領よく勉強できる参考書である。消化器科入門書として開業医はもちろん、消化器科専門医の誰もが熟読してほしい卒業教育のための書籍である。

● A5 頁 160 図 21 写真 46
カラー写真 24 表 16 1999 定価
(本体 3,400 円+税) ㊦ 400

医学書院 刊 (㊦ 03-3817-5657)